

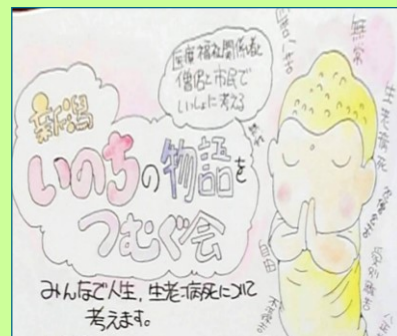
# つむぐニューズレター

新潟いのちの物語をつむぐ会

事務局：〒940-0075 長岡市渡里町 1-2 長永寺（木曾 隆）

電話：0258-33-0804/Mail: [info@tyouejji.com](mailto:info@tyouejji.com)

<https://www.inochinomonogatari.com>



## 第10回例会 in 上越柿崎 ご案内

**2023年5月27日(土)14.00-16.30/会場 浄福寺** (上越市柿崎区柿崎 6654)

● **テーマ 「病告知の後で～病のむこうに見えてくるもの～」**

★ **話題提供 1 「がん告知のあとで今思うこと」** 木曾厚さん

1949年生まれ。学習院大学卒業、長岡市役所勤務。中越地震後に災害復興室長、長岡水道局長等歴任。定年直前の2009年白血病を発病。長岡赤十字病院の無菌室に入院、半年後退院。

★ **話題提供 2 「35年ぶりに再会した父と、死ぬまでの6日間」** ほう(法生)さん

1979年新潟県生まれ。神奈川県在住。書画作家。2000年より「家族の愛」をテーマにした創作活動を開始。世の中で起こるさまざまな問題を作品に昇華しながら、子どもたちの笑い声だらけの世の中をめざし制作を続ける。著書「ERATH おじさん46億才」「買いものは投票なんだ」

★ **いのちの物語を紡ぐ全体会** ★ **法話「死は存在しない」** 浄福寺住職・井上陽雄さん ★ **詩の朗読** コウスケさん

**申込 新潟いのちの物語をつむぐ会事務局**

長岡市渡里町 1-2 長永寺内/電話 0258-33-0804 mail [info@tyouejji.com](mailto:info@tyouejji.com)

[https //www.inochinomonogatari.com](https://www.inochinomonogatari.com)

**参加費 一般 1000円 会員 500円 学生無料**

今、「二人に一人が癌になり、そのうちの三人に一人が亡くなる」と言われています。医師から「あなたは〇〇癌です。」と告知されたら、どんな気持ちになるのでしょうか。しかも、その癌が末期と言われたら、どんな絶望や恐怖を感じるのでしょうか。「癌イコール死」ではありませんが、病気を克服したとしても、私たちはやがて必ずその時(死)を迎えます。そんな現実のなかで、皆さまの体験を聞かせて頂いて共に話し合う中で「希望」を見出せたらいいなあと思います、このテーマを取り上げました。

私からも「死後の世界」について、仏教の教えを絡めてお話をしたいと思います。そして最後に皆様に素敵なプレゼントをしたいと考えています。興味のある方は是非参加下さい。(上越地区代表 井上陽雄)

## 第9回例会ダイジェスト

2022年12月4日(日)の午後、長岡市にある長永寺にて、第9回例会が開催されました。感染者数としてはかつてない程の拡がりとなり猛威をふるっているコロナ禍の中ではありましたが、感染予防とソーシャルディスタンスをとった会場には30人を超える参加者がありました。



会場の住職木曾さんからの法話に始まり、黒岩さん、中塚さんからの話題提供、そして参加者一人一人が自身のいのちの物語を語るグループワークで会は締めくくられました。

話題提供者、参加者ともに長年胸に秘めた辛い体験やいのちを巡る熱い想いを語りあう充実したひと時となったのではないのでしょうか。本ニューズレターではその一端をご報告します。

## ◆法話「仏さまと私」長永寺住職 木曾隆さん



子供のころからの疑問がありました、仏さまはどんなお方か？寺に生まれても仏さまが解らない。正直、仏教を大学で学んでもお経の中で説かれた仏さまのことは理屈で理解できても仏の存在を実感できなかった。

長岡へ帰ってからいろいろなお寺の法座を聞きに回って仏さまを考え、そして自分自身も布教使の資格を取った。それは仏さまを門徒にいかにか説くか。多くの人々は仏とは何かを問うことより、仏教を先祖供養や自分や家族の平安を願う道具のように思っているのではないかという気持ちがあったからです。しかし人生は苦しみも多く、思い道理にならないのが現実です。仏法に遇うと不条理な苦しみの中に生きている私を常に見守り、働き続けている存在が仏さまであることに気づかされます。仏さまを形や物として考えていた私に真実を知らせ、働き続けていた働きが仏さまだと気づかされたのでした。曾我量深師は「仏さまとはどんなお方であるか 我は南無阿弥陀仏であると名乗っておいでになります。仏さまはどこにおいでになるか 仏様を念ずる人のところにおいでになります」と述べています。浄土真宗的に言えばお念仏するところに仏さまはいるのです。いつでもどこでも誰でも仏さまに呼びかけられているのです。それに気づくことが出来ずに自我中心にしか生きられずに苦しんでいる私に「わが名を称えよ」と呼び続けている仏さまです。

\*最後に親鸞聖人言葉を紹介します。

「無明の大夜をあわれみて 法身の光輪きはもなく (無明の大夜 真実に暗い私)  
無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する」 (法身 大宇宙の真理成るもの)  
(無碍光仏 阿弥陀仏) (安養界 浄土) (影現 形をとって現れる)

「久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあわれみて (久遠実成 真実真理なるもの)  
釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する」 (五濁 この世の様々な濁り)  
(迦耶城 インドブツダガヤ) (応現 人間に应じて現れる)

真実真理なる働きが私を救うために阿弥陀仏となり、インドにお釈迦様となって現れ出てくださった。

## ◆「難民」とはということか？ 医療法人萌気会顧問 黒岩卓夫さん



実は自分や家族が難民であったので、つい多くを語る形になってしまい、わかりにくい発言になってしまった。マスコミなどは“難民”を安易に使う。介護難民とは特養待機者をいう。実際は現状は特別な死もないし、登録しただけで“難民”だ。実際は家庭や病院などで立派に生きている。故小山剛さんは、これに対して難民はゼロだと断言していました。

私は戦争を例えればウクライナとか、世界中で発生している民族や宗教をめぐる戦争であっても、戦争という大きな舞台があり、お互いに自分が正義であると主張し合い、敵味方がある。それに対して本当の難民は敵味方なくただ惨めさと悲しみと死がある。悲しみには抱き合うこともできる。そして小さな生

命ひとつでも、理不尽で何の罪もなく奪われて行くことが、難民の本質として小さいことのように見えても大きなテーマであると語りたかった。

一方、四男の揺光が故スージンと共に国連の仕事として支援したアフリカのケニアにある、ソマリア難民の“まち”は世界でも最大の40万人だ。すぐ死にはしないが、ここにたどり着くまでにたくさんの命をおとした。そして若者には希望がない、絶望の生活だ。これも難民には違いない。さて満州開拓団の医師の父と親子6人の生活が突然戦争に巻き込まれ、バラバラにされ、2人の幼な子(妹と弟)の生命が喪われた。また開拓団の女の先生(卓夫1.2年の担任)は2歳の坊やを抱きしめても、抱きしめても冷たくなって死んでいった。この現実が生み出した絶望と悲嘆。親として救えなかったことの悲しみと無力感。その深さは親の一生を変えてしまった。こうした悲しみが戦争であり難民であると思う。



満州の平原に押し寄せたソ連軍の戦車部隊

1945年8月9日ソ連参戦と侵略。8月15日日本の無条件降伏。ここから正式に満州難民が生まれた。中国への侵略者の日本が負けても、どこからの救いもなく死んで当たり前。国際機関もない。あるとすれば抑圧し、殺戮してきた中国人のお情けしか頼るものはなかった。その結末として、親のない子が育てられ、結婚も生きる手段だった。日本はこの人たちへの救助も全くしなかった。祖国である自分の国は参戦以前に満州北半を放棄し、力になる男を全員招集してしまった。老人・女・子どもだけが残された。棄民だ！



葉子と満州男

満州男(4歳)は9月27日ハルピン中央寺院周辺で死亡。母がやむを得ず頼んだ他人の少年の背で「みず、みず」と小さな声を残して死んだ。母の知らぬ間に。そして遺骸はどう処理されたかもわからない。

10月8日葉子(6歳)は収容所の固い床に毛布1枚を敷いて、褥瘡までできて死んだ。「イタイ、イタイ」と泣いていた。ストレスと栄養失調、それでも「桃の缶詰」が食べたいと言った。母は葉子が大事にしていた赤い小さな靴を売って、(お金全くなし)そのお金で買って来たが、すでに食べる元気がなかった。最期になる前の日に「リンゴ、リンゴ」と言った。母もすでに目もよくみえない錯乱状態にもなっていたが兄(小5)が仲間と一緒にリンゴ1つをかすめ取ってきてくれた。葉子はそのリンゴ1口も食べられずに死んだ。ハルピンの10月は、夜は冷たく寒かった。私は小2だったが、今記憶に残ることは、葉子が死んだという事実。しかし悲しかったとか涙がでて



黒岩家の墓地で  
右・妹 葉子  
左・弟 満州男

たという記憶はない。しかし翌朝収容所内の死体置き場に、布にくるまれた小さな丸太棒のようにされて、他のたくさんの死体と共にたくさんの死の1つとして早朝トラックで運ばれて行った情景はみていた。涙が枯れているのか、ただ見ていたという記憶だけだった。

2歳の坊やを抱きしめて、冷えていく幼な子の体温から死を宣告された先生は生きて帰り、2人の女の子を生み育てたが、先生の心は死ぬまで冷たくなかった坊やを抱きしめている自分しかなかった。そしていくら抱きしめても助けられなかった母親として一生を終えた。

私は、このつむぐ会では、難民はこうしたそれぞれのたくさんの小さな生命でも小さな物語として、ひそかに抱

きしめていることしかできなかった母のことを皆さんにお伝えしたかった。

私は葉子や満州男と兄として楽しく遊んだ記憶がない。今の孫たちをみて、この二人に比べればどれだけ贅沢して我が儘に遊んでいるのか。二人は食べたい甘いお菓子もなかった。遊園地や公園もなかった。おもちゃも買ってもらえなかった。葉子と満州男ごめんね。何もしてあげられなかった兄だったんだ。許してほしい。あとはパワーポイント資料をみて想像して下さい

私は、ようやく仕事に余裕ができたのか、75歳になって、妹と弟の「墓碑」をつくった。大町市の墓地に信州の道祖神にちなんで二人仲良く立っている石像をつくった。今の日本の石屋は全て中国でつくる。この二人の道祖神もそうだった。しかし二人の写真をみてつくったものが驚くほど二人が生きているような石像にしてくれた。一介の中国の石工の仕事だ。涙が出て頭が下がった。葉子と満州男へ、兄も近いうちに行くので笑顔で迎えてほしい。

なお私と2人の妹と弟のことを私の生涯のひとつとして、長女のパートナーが小椋佳さんの詩をとりあげてくれ、その心が私の記憶と触れ合うものとして節をつけて歌ってくれた。その詩を私が膨らませて詩文にもしました。



黒岩家 石碑  
正面

大人でも小さな子どもでもたくさんの人が死んで行く。シベリア抑留後生還した詩人の石原吉郎はたくさんの人が死んで行く（殺されることも）ことの恐ろしさは、「殺されることではなく、そのなかにひとり一人の死がないということだ。」と書いてある。ここで登場した3人の幼児も、生まれてから死ぬまでの物語は、誰かが語らねばならない。どうかこの会にお出での方々が今をはじめ小さな物語として受け止めていただければうれしく思います。

## ◆国境なき医師団に参加して

### ～ひとのいのちの物語～ 燕労災病院外科医師 中塚英樹さん

新潟いのちの物語をつむぐ会は縁あって5年ほど前より世話人として関わっています。今年4月、国境なき医師団外科医として中東のイエメンに派遣されました。その経験を踏まえ、ひとのいのちの物語と題して今回の長岡例会で話題提供いたしました。講演の内容を紹介いたします。

自己紹介です。出身は新発田市です。医師を志望した理由は人間に関わることに興味があったからです。

大学卒業後は、新潟大学外科とその関連病院で研修、勤務しました。大学では生体肝移植の臨床に携わり、一般病院では消化器癌の手術の経験を積み重ねました。



普段私は消化器癌、乳癌の手術や抗癌剤治療をしています。さらに医療では治すことが出来ない患者さんに対する緩和ケア、在宅看取りも行っています。患者さんの年齢層は70から80歳代の方が多いです。

日本人は二人に一人が癌に罹患するといわれています。外科医として臨床で悩ましいのは、高齢患者さんの手術適応の判断です。癌が見つかったら即標準手術とはなりません。手術は体の負担を強いる治療ですので、癌は取り除いたけれど寝たきりになったでは申し訳ありません。人生はいのちの物語です。今その患者さんは、物語のどのあたりにいるかを見極めて、適切な治療法をお勧めしています。もし終末章が近い方であれば、手術はおすすめしません。自分で立ち位置を理解し、明確に意思表示する方もいます。本人、家族、医療者で話し合い、病気とどう向き合っていくかを積極的に語り合います。今後の人生の優先順位を主体的に考えてもらい、現代の医療水準をできるだけ享受できるよう、方向性を決めていきます。

一方、世界ではどうでしょうか。開発途上国では、先進国では治療できる疾患でも、命を落とすという現実があります。このような医療格差が21世紀の今でも存在しています。早急に差をなくすのは困難と思いますが、外科医として現場で医療に関わることはできます。幸い、家族や職場の理解がありましたので、この度国境なき医師団に応募して、中東のイエメン共和国での医療支援活動に参加しました。

イエメンはアラビア半島の先端に位置する国です。2015年から内戦が継続しており、私が勤務した国境なき医師団の病院は、モカ(モカコーヒーのモカです)にある救急外傷センターでした。テント作りの建物ですが、入院病棟、外来診察室、救急診療室、集中治療室、産婦人科病棟、新生児集中治療室、手術室と分けられていて、冷房が完備されて快適に診療ができました。症例は銃創、爆傷、交通外傷がメインで、他は虫垂炎、腸閉塞など通常日本の病院でも見られる疾患でした。患者は兵士、一般成人男性だけでなく、地雷を踏んでしまった女性や流れ弾に当たった女の子もいて心が痛みました。しかし、このような内戦中の国でも、人々は家族、友人を愛し、明るく、毎日生活を送っていました。我々日本人とどこが違うのか、日々自問していました。イエメンは厳格なイスラム国家であり、イスラム教が憲法です。病院職員でも決まった時間にメッカの方角を向いて礼拝していました。死亡患者の家族が取り乱すような場面は見かけませんでした。信仰がある人は、なぜ？と科学に答えを求めない強さがあるといわれることがありますが、それを強く感じました。

いのちの物語は人それぞれですが、生まれる、死ぬ(疾病、外傷、事故、自殺、戦争)は一緒です。どこで生まれるかは選択できません。子供の笑顔は日本もイエメンも同じです。生まれる国によって、物語のページ数が異なることもあるかもしれません。しかし、極端に短かかったり、突然終わってしまうと物語は紡げません。私たちになにかできることはあるのか、ないのか。毎日考えています。

## ◆参加者一人一人が紡いだいのちの物語 time

### グループ1

○人はどこの国に生まれるかは不明。日本に生まれたことは幸せ、いい国だと思う。でもがんで亡くなる人が多い。イスラエルはがんになる人は殆どいないと聞く。中塚さんが何を考えて医者になったか話して欲しかったが、医師としてのいのちをどうみるかを知ることができて良かった。



○64歳で胃がんが見つかった。1カ月遅かったら半年の命だった。まずは3年生きましよう、そして10年の人生計画を立てた。思い通りにはいかないものだがあれから10年が経った。枕元には電話、薬など置いておく。再発の恐怖がいつもついてまわり苦しんでいるが、座禅を行っているなか、日常生活が取り戻せてきている。

○黒岩さんの話はこれまでよく聞いている。戦争の話はおばあちゃんに訊いたが話してくれなかった。「はだしのゲン」の内容とおばあちゃんの「辛いから話したくない」の内容が少し理解

できた。戦地の話し。子供が生まれて、子供が戦地に送り出される場面を考えさせられた。

○今日は夫の命日なので聴きにきた。胃がんで死んだ。父は昭和20年2月に自分と3歳と1歳の弟を残し、「父は天国にいて・・・」という遺言を置いて戦争に行った。満州で死んだ。宿舎から15メートル離れたところに埋めたが、戦友が持ち帰ってくれた。退職後に満州に行った。憎しみをもって行ったが、現地を見てお互いが悪かったと感じた。戦前の物語を今の人たちにも知って欲しい。

○母は東京で戦争にあつて長岡に疎開してきたという話を聞いたことがある。自分も死が目の前に迫ってきた年齢になった。計画的に片づけを行っていきたい。

## グループ2

○新津から天候が悪い中來ることができた。黒岩先生の話は10%しか聞き取れなかったのが残念だった。イエメンは、暑い中お疲れ様でした。

○長岡出身の母の父親はフィリピンで戦死し、骨も残っていない。母は、自分の父がかわいそうだから、自分と一緒に長岡の墓にはいるとあって、父と毎年喧嘩をしていた。二人で話し合つて、父親は手を合わせてお参りをさせて頂き、老夫婦仲良く新潟のお墓に入るようになった。今日の話では戦争の悲惨さがよくわかった。いろいろな人生を見せてくれて有難かった。



○職員なので、これまでも同じような話を聞くことはあった。70年前の話と、国境なき医師団の話、両方とも自分にとってはニュースと同じで自分には関係ないという印象で、自分ごとではなかった。

○中越地震のとき、いつどうなるかわからない状況の中で実家で足の悪い母親と同居した。母の隣で寝ることがこんなに安心するのかと思ったことを思いだした。(戦争のことを話すためには)しゃべれる環境をつくらなければならない。あるおばあちゃんが、それまで20年間戦争のことなど話す機会がなかったが、認知症が始まってから、戦時中母が子供を手につけねばならなかったことを繰り返し話すようになった。

○初めて参加した。過去も現在も、戦争ではひとのいのちは簡単に失われる。わたしも、現役のころ、血液がんで半年入院した。家族は生きて戻れないだろうと思っていた。自分は楽観的だった。良い経験ができたくらいに考えていた。5年以内に再発する可能性が高いと言われていたが、生かされているという感覚で14年間生きている。幸せに好きなことをして生きているが、何か別のことをやるべきなのか？という反省もある。

○大谷派の僧侶です。父は傷痍軍人であったが、まったく戦争のことをしゃべらないまま亡くなった。

まず大抵の戦争体験者はしゃべらない。あちらは(しゃべってもしょうがない)。自分でも聞かない。今思うことは、生きてきた長い苦労の中で、今だったら父の話を聴ける、ということ。戦争のはなしでも、人生のはなしでも、しゃべるほうと聞く方両方の成熟が必要。

○曹洞宗の僧侶。戦後50周年に沢山の人 came。未亡人の人が多く、最後の法事と思っていたのかもしれない。ほとんどの人は戦争のことを話さないが幾つか話がある。真面目で生前何も話さない人だったが、レッドというウイスキーを買ってきて飲むような酒の強い人だった。亡くなってから妻がその人のことを話した。中国で女子高の教師をしていたとき、ロシア軍が攻めてきた。その人は、兵士に酒をふるまい、自分も一緒に毎日酔いつぶれるまで飲んで、結局その学校では女子生徒は誰一人兵士に乱暴されなかった。満州でのことは言うともあまりにも悲しすぎるといふ人がいた。朝鮮半島から引き揚げてきたことは言うが、詳しいことについては何一つ語らない人がいた。本当の話は辛過ぎて話さない、とのことだった。100歳を超える医師は、やはり医師だった息子を胃がんで亡くした。息子は生前橋本禅巖老師のもとに通っていた。息子が亡くなったあと、何を話していたのか老師に尋ねると、「ここに来る人はみな自分で解答を持っている。」と語った。

○母親は従軍看護師としてシナ事変の際に従軍したときに、兵士たちが白樺の木の皮に自分の感情を書いて彼女に託した。

### グループ3

○イエメンの人にとってイエメンは環境がいい訳ではないが、生まれ育った人生だからと考えている。外国人が一人だと誘拐されるので外に出られず息苦しい。紛争中ではあるが最低限の生活はできる。色々な人生のストーリーがあると思った。

○海外から帰ってくると日本とのギャップに驚かされる。戦争は明日起こるかも知れない。

○以前の暮らしはわからないが、日本に生まれて現在の時代に生まれてきて良かったと思う。

○戦争を知らない世代に育ったため、話をきいて初めてわかることが多い。



○南魚沼市は田舎で都市部ではなかったのが残念だが、生まれる場所は選べない。

○(内戦の只中) それでもイエメンの人は生きている。家族とのつながりを大切にしながら自分のいのちを全うする。死は自分がこれまで生きてきた様々なものを一気に奪われる。

○戦争は人間が作り出す。自分の子供を殺すようなことは本当に嫌。イエメンではそんな過酷な状況の中で人々がニコニコしている。どうしたら幸せになれるか、人生を全うしたい。

○人類の歴史は戦争の歴史だったが、以前に比べればまだましなほうではないか。でも人類はまた戦争をおこなってしまうのではないか。悲劇は繰り返される。

○幸せって何? 物理的な面から視点を変える。幸せの基準や定義を変える必要がある。

○高校時代は何を考えても結論が出なかった。息子の子供がヨルダンで生まれた。ヨルダンに行ったことがあるので、(戦争といのち)について実感できる。

○(戦争によって) 急に環境が変わる。予想できない。一人一人死んでいく。毎日死んでいく。戦争でミサイルが飛んでくる。どうしたら悲しみを共有できるか。

○今の日本では経験できない話。でも、ほんのちょっと何かが違えば難民になっていたかも知れない。

全ては神のはからい。与えられたいのちを全うしたい。

○在宅の叔母を看取った。感謝の言葉を言う人で、とても賑やかな人だった。食事をしている横で息を引き取った。死を考えることがあった。与えられたいのちを一生懸命に生きようと思う。

◆第9回新潟いのちの物語をつむぐ会を開催して

雪まじりの氷雨の中長岡からの帰途、高速道路にて、突然、胸を衝かれました。

黒岩さんの語っていた、2歳の娘を抱いたまま失くし、そのトラウマを抱えた佐藤先生は、そのまま黒岩さんだったのだと。ハンセン氏病の一病人のように、そのくぼんだ眼窩から洪水のように大粒の涙を流していたのは黒岩さんだったのだと。マスオさんとヨウコさんのために、菩薩さまのようなきれいな童子を刻んだお墓をつくり、繰り返し繰り返し慟哭されていることを。帰り道に気付きました。本当に本当に有難うございました。詩と映像で大きな悲嘆の昇華を見せて頂きました。

撰氏 45度の彼の地で銃創の治療に担ぎ込まれる病人を手術し続けた中塚さん。わかったことは、いかなる時代でも、いかなる土地でも生と死は同じであるということ。彼の地まで行ってそれを確認せずにはいられなかった中塚さんの人生を開示していただきました。有難うございました。

新潟いのちの物語をつむぐ会代表 今井洋介

新潟日報朝刊に会の様子が掲載されました。

(日刊) 新 潟 日 報 2022年(令和4年)12月13日(火曜日)

### 紛争地での医療 難民問題考える

戦争と命テーマに講演

長岡

「戦争と命」をテーマにした講演会が、長岡市渡里町の長永寺で開かれた。医療・福祉関係者や宗教者をつくる「新潟いのちの物語をつむぐ会」が開催。市民ら約30人が参加し、紛争地での医療体制や難民問題について考えた。

4日の講演会では県立燕労災病院(燕市)の中塚英樹医師(54)が、今年4〜6月に国境なき医師団(MSF)の外科医として内戦が続くイエメンに渡り、銃撃や交通事故に遭った患者の治療に当たった経験を語った。最低限の医療機器しかない途上国と日本の格差を目の当たりにし、「自分のできることを考え、一つずつ実行していくことが大事だと感じた」と話した。

医療法人社団萌気会(南魚沼市)の黒岩卓夫会長(85)は、家族で満州(現在の中国東北部)にいた8歳の時、ソ連軍の攻撃を受け、難民になった体験を語った。栄養失調やストレスで弟と妹を亡くしたと語り、「きょうだいで楽しく遊ぶこともなく死んでしまう子どもがいることに、思いを巡らせてほしい」と呼びかけた。

参加した新潟市東区の看護師、関根典子さん(53)は「2人の話を遠い出来事と思わず、歴史や当事者の思いを知ることが大切だ」と話した。

写真||戦争と命をテーマに、紛争地での医療体制や難民問題について考えた講演会||長岡市渡里町

編集後記 ●「ニューズレターの発行。私が引き受けます。」と手を挙げたものの、ワードでの編集などやったことのない者の情けなさ。後悔先にたたず? 自ずと出来栄は、昔のガリ版刷りレベルとなってしまいました。手弁当の本会ならではの御愛嬌とご容赦下さい。でも話題提供者・ご参加者からのご発言の数々は、本当に内容が濃く、お陰様でいのちをつむぐ会に相応しい誌面とさせていただくことができました。ありがとうございました。(関谷)